

日本統治下中等諸学校校友会雑誌・生徒記載文にみる

アジア観の変容

— 盧溝橋事件前後を中心に —

梅野正信（上越教育大学）

台湾総督府、朝鮮総督府及び満州国に設置された中等学校・校友会雑誌の記述をとりあげて、特定の期間に限定して生徒のアジア観を概観する。

中等学校への進学率は昭和期に入っても比較的少数にとどまっていたが、それでも大学、専門学校、高等学校等と比べ広範な層が進学していた。校友会雑誌は、総督府、学校、教師の実質的検閲下にあり留保を要するが、中等学校という少年期にかかわる「学校文化の源流」（斉藤利彦）をたどる作業に欠かせない歴史的記録の一つといえよう。

本研究は、戦前期に「外地」と呼称されていた地域のうち、植民地教育が実施された地域、日本の影響下と実質的統制下にあった地域の中等学校、とりわけ中学校、高等女学校、師範学校に相当する諸学校で発行された校友会雑誌の掲載記述を検討し、ここにおいて素朴なアジア観、アジア認識がどのような特色を要素から構成されていたのかを整理する。

校友会雑誌に記載された生徒の記述は、検閲や時代状況に鑑みると、生徒個々人の思想の発露・表象とするには留保が求められ、歴史的・批判的検討とともに、関係各国の歴史研究者・教育学研究者との共同研究を通じた多様な視点からの総合的な考察が必要である。また、考察の範囲は校友会雑誌に描かれ表象されたアジア観の特色に限定される。

校友会雑誌に表象されたアジア観を再構成する作業は、時代を理解する歴史的作業の一端であるとともに、戦後の日本及び東アジア諸国の地域社会に受け継がれたアジア認識の水脈の一端をたどる作業ともなるのと考ええる。

本報告の内容は「戦前期における中等諸学校（師範学校）生徒のアジア認識に関する総合的研究」（科学研究費（基盤 B）2013 年度～2015 年度）中間年報告書の準備段階にあたる。

台湾総督府、朝鮮総督府、及び関東庁、満州国の統治下における中等学校は、中学校、高等女学校、師範学校に限っても 300 を数えるが、史・資料の収集は、台北第一中学校、京城中学校、大連第二中学校など、特定の諸学校にとどまった収集状況にあり、とりわけ朝鮮半島における資料収集は必ずしも十分とはいえない。また、師範学校関係の校友会雑誌の収集は、台湾を除いては、現段階では極めて限定的である。

日本本土の外にあって日本人及び当該国及び地域の人々を在学させていた中等学校は、主に台湾総督府（、朝鮮総督府、関東州、樺太庁、南洋群島、現中国東北部にあたる戦前の満州国、そして中国国内に設置されていた。

本報告では第一に、比較的まとまって資料確認が可能な数校の校友会雑誌をもとに、これら諸地域のアジア観、アジア認識に少なからぬ影響を与えたと推察される、I 山

東出兵（1927～28 年）に至る時期、Ⅱ山東出兵から柳条湖事件（1931 年）を経て盧溝橋事件（1937 年）に至る時期、Ⅲ盧溝橋事件から真珠湾攻撃（1941 年）に至る時期、Ⅳ真珠湾攻撃から敗戦（1945 年）に至る時期にわけ、各期における言説の特徴、言説を構成する諸要素の特色を整理する。また、第二に、校友会雑誌の地域横断的比較が可能となる前記Ⅲの時期を中心に、中学生による記述を比較してみたい。

校友会雑誌は個々に特色ある構成をとっているが、おおむね論說的記述（台北第一中学校『麗正』では「想華」）、随想的記述（同「詞藻」）、紀行的記述（同「紀行」）として掲載されている。

本報告では、これらの言説に表象されたアジア観を、校友会雑誌言説の一部と位置づけ、検討してみたい。